# 乾燥の戦略／湿潤の思考

## ――土器づくりにみる東西アジアの対比――

齋　藤　正　憲

### Ⅰ．問題の所在

『森林の思考・砂漠の思考』を著した鈴木秀夫は、同書冒頭にて、「人間の考え方にとって、もっとも大きな問題のひとつは、私とは一体、何なのだろうかということであると思う」と記し、「私とは何か、という問いは、世界とは何かという問いになる」と考えた。そしてこの場合の世界とは、自分が「世界をどうみるかという世界観の問題」（傍点は原文のまま、鈴木 1978: 3）であるという。そして「すべての人がそれぞれの世界観を、多くの場合、無意識に持って」おり、「その無意識の世界観に支配されて、人びとの日常生活が規定されている」との見解を示した（鈴木 1978: 4）。そのような世界観について、風土や歴史の観点から追究した鈴木は、『風土の構造』という別の著作において、「気候と人間の関係を論じる際に、その中間項としての生産関係があり、人間は、それを通して気候とかかわりあっているから、その中間項が明らかにならなければ、気候と人間の関係を認めるわけにはいかない」（鈴木 1988: 124-125）と綴っている。いみじくも鈴木が指摘しているように、気候と風土をめぐるさまざまな議論は和辻哲郎の『風土』を嚆矢とし（鈴木 1988: 15）、爾来、連綿と積み重ねられてきた。それこそ、枚挙に暇がないほどに。そしてアジアについて、風土の視点から大まかな東西の対比を念頭に置きつつ、そのうえで諸文化を評価し、ひいては日本文化を語った言説のいくつかは大きな反響をもって迎えられ、広く人口に膾炙したことはたしかである（cf. 梅棹 1974）。世界観の追究が、根源的な要望であることの証左といえよう。しかし一方で、そのような知見が共通認識にまでは至っていないのも事実であろう。「人間の物の考え方が複雑極まりない」（鈴木 1978: 3）ことが大きな要因であるのは間違いないが、やはり鈴木が警鐘を鳴らしたように、「中間項」の検討が不足してきたことに疑いの余地はあるまい。何らかの「中間項」を策定しつつ、アジアを俯瞰し、風土と人間の関係を考えてみる。そんなアプローチがはっきりと意識されるのである。

では、「中間項」とは何か。もちろん、さまざまな「中間項」をわれわれは見出し得るわけだが、本稿ではそれを土器製作の技術とそれを支える職人組織の在り方に求めようと思う。今なお伝統的手法で土器を製作している民族誌を紐解くとき、陶工は風土と密接な関係を切り結びつつ、一方で伝統を墨守し、他方で革新にも踏み込む。外来の技術を導入する際にも、与えられた環境の桎梏から陶工が解き放たれることはない。身近な素材に依拠せざるを得ず、入手できる燃料を用い、特定

の環境（温度や湿度といった気候条件）のもとで、陶工は粘土と向き合い、土器を焼き上げる。このような土器づくりはまさしく、風土と人間の関係を説明するに足る「中間項」としての十分要件を備えていると目されよう。加えて、かくも環境と分かち難く結びついた技術を駆使するのは、人間だ。技術や製品にのみ目を奪われるのではなく、その技術を運用する陶工たちの価値観や生産過程における人間関係（職人組織）にも留意する。そのような視点を見失わなければ、土器づくり民族誌は「気候と人間の関係」を雄弁に物語る指標となり得、「中間項」としての必要条件をも満たしてくれるものと期待されるのである(1)。

## Ⅱ．前提

### 1．アジアについて

本稿では、土器づくり民族誌の観点から、広くアジアを鳥瞰したいと目論んでいるが、当のアジアはいたって複雑で、あまりに茫洋としている。そもそも、「日本文化」ですら一元的ではなく多元的であると考えるのは、もはや共通認識にもなっていよう（cf. 赤坂 2000: 115-116）。研究対象とする地域や文化集団を接視すればするほど、複雑な様相が彫塑されてしまうのは、ある意味、必然である。そしてこのような姿勢を貫く場合、中国やインドを広大無辺のアジアにおける「二つの中核」（中根 2002: 148）と見做すような視座は痛烈な批判にさらされるだろう。しかし、だからといって、個別事象の詳細をあえて捨象し、巨視的な視座を意識的に選択するアプローチを等閑視するべきではあるまい（cf. 内田 2009: 17）。マクロなアプローチが実践された好例として、柄谷行人の言説（2010, 2014）を、以下に紹介したいと思う。

「世界＝帝国」というシステムにおいて、それと隣接する「周辺部」は「中核」によって征服され、吸収される傾向が強い。逆に、「周辺」が「中核」を征服し、結果として両者が同化することもあるという（柄谷 2010: 161）。しかし、そのさらに外側に位する「亜周辺」は、「中核」を選択的に受け入れることができる地域であって、「周辺」とは峻別される。もちろん、「世界＝経済」が卓越する現在（柄谷 2010: 243）、中核／周辺／亜周辺の構造が大いに変質し、また刻一刻と変貌しつつあることは論を俟たない。しかしながら、「世界＝経済を、世界＝帝国の亜周辺の現象として」（柄谷 2014: 211）とらえることができるのであれば、広大なアジアを中核／周辺／亜周辺という巨視的な枠組みにもとづいて整理しようとする視座が無謀とはいい切れまい。筆者はなにも、柄谷の示したアジア観を盲目的に受け入れようというわけではない（cf. 齋藤 2014b, 2015b）。氏の如き俯瞰的な視座をもちつつ、広大なアジアに踏み込もうとする意欲的な試みに大いに賛同したいのである。このようなアプローチの有効性を検証する意図も含めて、本稿の作成に至ったことを明記しておきたい。

### 2．土器製作技術について

また、土器の生産様式を考察する前提として、その製作技術を概観しておこう。アジアの複数の場所で土器づくり民族誌調査に従事するとき、筆者の脳裏にまっさきに思い浮かんだのは、エジプ



**写真１**　エジプトの蹴ロクロ
（アブ・ラグワン）



**写真２**　台湾原住民の叩き成形（蘭嶼・ヤミ族）



**写真３**　エジプトの昇焔式窯
（アイヤート）



**写真４**　台湾の野焼き
（蘭嶼ヤミ族・開放型）



**写真５**　台湾の覆い焼き
（豊浜村アミ族・籾殻覆い）



**写真６**　黒斑の目立つ土器
（籾殻覆い焼きによる焼成）



**写真７**　林立する昇焔式窯
（エジプト・デルタ地帯、ムハンマド・ガウィーシュ）

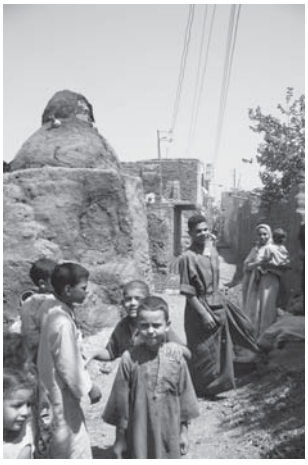


**写真８**　昇焔式窯と陶工たち
（デルタ地帯、グレース）

トと台湾の顕著な対比である（齋藤ほか 2003, 2004; 齋藤・鈴木 2007, 2008, 2009, 2011, 齋藤 2010a, b, 2011a, b, 2012a, b, c, 2013, 2014a, b, 2015a, b; 佐々木・齋藤 2002）。土器生産をめぐる諸技術を概観しつつ、第一歩として、東西アジアの対比を確認しておくべきであろう。

土器をつくるうえで、まず着手されるのは、素地となる粘土の準備である。粘土は比較的近傍で入手されることが多い。台湾蘭島ヤミ族ではかつて、徒歩１時間ほど山中に分け入って粘土を採取していたというが（齋藤・鈴木 2007: 49）、棚田の畔の粘土を活用する事例が目立つ。このように、畑や水田に由来する、手近な材料に頼るケースがほとんどで、エジプトも台湾も状況は概ね似通っていよう。これを、たとえばエジプトでは水簸の工程を挟むものの、総じて、手作業で混錬し、陶土とする。ただし、インドネシアでは専用の混錬機（粉砕機）を活用する事例も見受けられ（齋藤 2014c: 53, 図19）、独自の展開をみせることもある。

つづいては成形の作業となるが、エジプトでは蹴ロクロ（写真１）への傾倒が顕著だ（例外としては、シーワ・オアシスの手捏ね成形や（齋藤ほか 2004: 83-84）、ファイユーム近郊の凹型叩き成形がある（佐々木・齋藤 2002: 91））。こうしたエジプトにおける蹴ロクロへの極端な依存は、台湾とは鮮明な対照をなす。すなわち、台湾では、内側にあて具としての円礫を構え、外側から羽子板状の叩き板で叩き延ばして器形を仕上げていく技術が卓越する（写真２）。利便上、作業用の木皿（齋藤・鈴木 2007: 51）や「工作台」（齋藤・鈴木 2009: 24）が活用されることがあるものの、水挽き成形を可能にするほどの回転力が得られるロクロの利用は、台湾の土器づくりでは一切認められなかった。成形技術におけるエジプトと台湾の懸隔は否定するべくもない。

成形技術にみられた東西の鮮明な対比は、焼成技術にも観取される。エジプトでは、昇焔式窯という専用の施設を用い（写真３）、土器焼成に臨む。昇焔式窯とは作品を設置する焼成室と燃料を燃やす燃焼室を上下に配した形式の窯である（齋藤 2015b: 54）。天井のある窯とない窯がある（齋藤 2012a）。いわば二階建ての構造を呈し、下の燃焼室で燃やした燃料の炎が上昇し、その火力によって、上の焼成室に置かれた土器を焼き上げるというものだ。燃焼室と焼成室は、ロストル（火格子）で分け隔てられ（cf. 木立 1997: 第１図）、これにより、燃料と土器が接することに起因する黒斑の発生を大幅に抑制できると期待される（齋藤 2015a: 3）。さらに焼成実験にもとづいた近年の研究では、２室構造の窯こそが制御可能であるとの指摘もある（Thér 2014: 94）。昇焔式窯を利用することで陶工は、より意図的に焼成をコントロールする領域に踏み込んだ。そんな解釈が成り立つだろう。

一方の台湾では、少なくとも伝統的な土器焼成においては、昇焔式窯の利用は皆無と見做してよい（cf. 齋藤 2011b: 84, 87-89）。台湾民族誌において観察し得るのはいわゆる野焼きであり、被覆材のない開放型の野焼き（ヤミ族, 写真４）と籾殻を覆い被せた覆い焼き（アミ族, 写真５）の２種がある。ともに土器に燃料が直接触れる焼成環境となり、とりわけ覆い焼きでは、明瞭な黒斑の発生を抑制することが難しい（写真６、小泉 2010: 998）。しかしながら、長時間に及ぶアミ族の籾殻覆い焼きは、「熱履歴」の観点からみれば、エジプトの昇焔式窯と遜色のない焼成を達成していると評価されるのである（齋藤 2015a: 6-8）。このことからは、つぎのような東西の対比が、鮮やかに

描出されるだろう。すなわち、東西の如何にかかわらず、土器焼成のスタートは野焼きであった。ここにいち早く昇焔式窯の導入に踏み切ったエジプトに対し、台湾では野焼き技術を改良して覆い焼きへと進む。換言すれば、西が“革新”であったとするなら、東は“改良”であったと評されるのである（齋藤 2015a: 図２）。

ところで、開放的な野焼きに被覆材を被せた覆い焼きを野焼きに含め、「開放型」と「覆い型」に区分することが一般的であるが（小林 2004: 203）、ときとして覆い焼きが昇焔式窯焼成に匹敵し、これを凌駕する事実を見逃すべきではあるまい。窯焼成と覆い焼きは並列的に評価されるべきものであり、ならば、焼成技術について、陶工には、昇焔式窯と覆い焼きという２つの選択肢が提示されていたとみるべきだ。その際、どちらを選ぶのか。その選択の意図を明らかにすることが、東西アジアの対比を正しく評価するうえで重要になってくると考えられるのである。

そして、昇焔式窯が西アジアに古くから認められるのは夙に知られている（Matson 1995: 1559）。同様の昇焔式窯は今日の中東地域、エジプトからアフガニスタンにかけて認められるという（Matson 1995: 1559-1560）。ならば、エジプトを含めた西アジア＝中東地域は同じ技術的基盤を共有していると解することに大きな齟齬はあるまい。乾燥アジア(2)は昇焔式窯(3)に著しく傾斜していると見做されよう。対して、台湾を特徴づける覆い焼きの技術伝統は、稲作文化圏全域に通底するものである（小林 2007: 図１）。覆い焼きを保持した湿潤アジアと昇焔式窯に移行した乾燥アジアの対比はあまりに鮮明だ。そしてこのような対比は、乾燥アジアと湿潤アジアの相克ともいえる。そのように換言することは、一定以上の蓋然性を帯びていよう。ここに、成形技術として前者に蹴ロクロ、後者に叩き成形がそれぞれ組み合わせれば、対比はさらに強調される。乾燥アジアと湿潤アジアは、それぞれで選択された技術の違いにもとづいて、はっきりと峻別されるのだ(4)。

## Ⅲ．乾燥アジアの生産様式

東西アジアにおける明瞭な懸隔を踏まえつつ、生産様式の検討に進もう。

エジプトにおいて17の窯場を訪ね、民族誌情報を渉猟した結果、そこに、看過できない事象を見出した（齋藤 2009a）。下エジプト・デルタ地帯に位置するいくつかの窯場では、作業小屋に焼成窯および水簸施設が附設する比較的小規模の土器工房が数十軒集まっている（齋藤 2009a: 34-35）。それぞれの工房は家族単位で切り盛りされる。陶工の家に生まれた男子は、幼少の頃から父親の作陶を手伝い、技術を習得する。長じると、結婚を機に、自分専用の工房を築き、独立するという（齋藤 2012c: 69-71）。よって、作業小屋・焼成窯・水簸施設という生産単位が数多く出現し、結果として、窯場には煙突状の焼成窯が林立することとなる（写真７，８）。また、老境に差し掛かっても、父親が健在であるなら、継続して土器づくりに携わっているケースも少なくない。しかし、たとえ親子関係にあっても、彼らが共同で土器をつくることはないというのだ。個々の陶工の経済的自立・独立は高く保たれている。エジプトにおいてはそのような理解が成り立つと思う。

なお以上とは別に、ロクロや窯を複数所有し、規模の大きな工房を構え、出自を異にする男性陶工が集まって土器を生産する事例もエジプトでは観察されている（齋藤 2009a: 36-37）。こうした

やや規模の大きな工房が、家族単位の小規模な土器工房と共存した点には十分な配慮が必要だ。しかし、男性陶工が集まって、一定の作業分担体制を敷きつつ、大規模な生産にあたっている事例が、上エジプト・ナイル河谷にいくつか認められた事実は動かない。すなわち、下エジプト・デルタ地帯では多くの工房が結果として集まりながらも、個々の工房の間の共同作業は行なわれず、工房の経済的自立が保たれているのに対し、上エジプト・ナイル河谷では複数の陶工が集まった集約的な生産様式が確認され、工房の垣根は取り払われているのである。ただし、そのような工房も孤立して存在することが多く（cf. 上エジプト・メダムード工房、齋藤 2012c: 101-103）、かつ、陶工の独立性は十分に担保されているのが常である。つまり、全体の傾向が揺らぐことはない。

このように、エジプトにおいては、個々の工房の経済的自立が突出し、陶工間あるいは工房間の共同作業が顕著ではない。作業分担体制をともなう集約的な土器生産もなくはないが、個々の陶工の独立性は保たれているのだから、個を尊重する感性が喚起されるのは当然だ。となれば、こうした感性をどこまで敷衍させることができるのかという疑問が生じる。そしてすでに言及したように、エジプトにおける昇焔式窯の伝統は乾燥アジアに通底し、この事実は、土器づくりの同じ技術的基盤を乾燥アジアが共有したことを示唆するであろう。もちろん今後とも、アジア観の構築に資する新規情報の収集を放棄するつもりは毛頭ないが、個々の工房の独立性が保持される傾向を乾燥アジアの特徴の一つと見做しておくことが飛躍のし過ぎであると筆者は考えない。たとえば、エジプトのダクラ・オアシスでは、男性陶工が複数集まって、１つの工房を形成する。ただし、ロクロは概ね１人１基が割り当てられ、さらに土器を焼くための昇焔式窯も陶工の人数分が築窯されている（齋藤ほか 2003: 図３）。男性陶工が集まって、高い専業性が達成されているにもかかわらず、分業体制の構築よりも陶工個人の独立性の確保が優先されているようにみえる。乾燥アジアにおいては、個人主義的風潮がしっかりと根を張っていると見做す根拠となるであろう。

## Ⅳ. 湿潤アジアの生産様式

さて、乾燥アジアにおいて、個々の陶工・工房の独立性が高く保たれているのを確認した。では、湿潤アジアではいかなる状況が見出されるのか。湿潤アジアにおいても、同様の民族誌情報から、生産様式に関する事例をピックアップしてみよう。

世界的にも稀有な世帯内生産にもとづく生産体制を継承していた台湾蘭嶼・ヤミ族では、各世帯の男性がそれぞれ個別に土器をつくっていた（鳥居 1902: 304; 齋藤 2009b: 117, 119）。こうした土器づくりの在り方は、夫方居住婚にもとづく核家族を基本とするヤミ族の居住・家族形態（三富 1993: 443; 野林 1996: 94, 100）に強く規定されたことは想像に難くない[5]。とはいうものの、焼成では複数の世帯が共同で実施することがあったとの報告もある（齋藤 2009b: 118）。独特の居住・家族形態を反映して個々の生産単位は独立しているが、共同作業が完全に排除されているわけではない点において、乾燥アジアとの差異を嗅ぎ分けることができよう。

対して、同じく台湾原住民である豊浜村・アミ族では、女性が土器をつくる。粘土採掘・素地調整から焼成にいたるほぼすべての工程で、複数の陶工による共同作陶が認められた（齋藤・鈴木

2009: 22-32)。「工作台」と叩き板を駆使して実施される成形の工程も、共同で行なわれるのが常である。民族誌情報にもとづけば、２～８名の女性陶工がグループをつくって、作陶に従事したようだ（齋藤・鈴木 2009: 32)。個別作業に依拠する生産は想定されておらず、あくまで共同作業を旨とし、よって、乾燥アジアとの差異は明々白々だ。

同じ湿潤アジアに位するインドネシアでは、異なった２つの生産様式を観察し得る。すなわち、ジャワ島西部・ブミジャヤでは、叩き・手回しロクロ・「斜めロクロ」・プレス機など多様な技術に依拠しつつ、土器を成形する（齋藤 2014a: 2-4)。住居の空きスペースを活用して成形作業に勤しむことが多いため、定型的な工房を見出すのは難しく、乾燥アジアとの異点となっていよう。土器を焼成する際には、幾名かの陶工が作品を持ち寄って、共同で焼成を行なう（齋藤 2014a: 4-5)。ただし、ブミジャヤでは乾燥アジアに卓越する昇焔式窯による焼成方法も知られるが（齋藤 2014a: 5-6)、上述のような共同焼成は覆い焼きに限られる。昇焔式窯を採用する工房は、カラワンやプレレッドというジャワ島西部の別の窯場でもみられたが（カラワンやプレレッドでは窯焼成が一般的で、覆い焼きの技術は残されていない。齋藤 2014c: 51-54)、これらの窯場では複数の男性陶工が集まった工房が見受けられ（齋藤 2014c: 53-54)、総じて専業性は高い。高い専業性については、こうした工房において、叩き技法ではなく手回しロクロによる成形が選択されていることからも窺い知ることができるだろう。

民族誌に依拠する限り、インドネシアでは焼成の基層技術は覆い焼きとみてよい。同地ではそして、覆い焼きに「焼き台」や「煉瓦による囲い」という改良が付加され、さらに「煉瓦による囲い」が窯壁へと発展することで、昇焔式窯への変容を遂げたと判断されるのである（齋藤 2014c: 54-55)。したがって、インドネシアにおける焼成技術の基層には覆い焼きがあって、それは長軸６ｍにも及ぶ規模で実施される（齋藤 2014a: 4)。つまり膨大な数の土器を一度に焼くのであるが、多くの土器を１人の陶工が準備するのは現実的ではない。乾燥まで済ませた未焼成土器を、複数の陶工が持ち寄って焼成するのが常態となり、共同焼成という様式が招来されるのは必然だ。かような理解に立てば、個別に実施される成形作業にフォーカスして、乾燥アジアとの類似を強調することは適切ではあるまい。共同作業に依拠する生産様式を色濃く保持しているのがインドネシアの現況であり、それは覆い焼きによる共同焼成という慣行に付随した可能性がある。そして何よりも、共同焼成の伝統が残された点において、乾燥アジアとの差異は明瞭である。共同作業が温存される生産様式こそが、湿潤アジアにおける土器づくりの本質であって、そこに乾燥アジアにおけるような個人が卓越する雰囲気は認め難い。筆者はそのように理解した。

## Ⅴ．乾燥の戦略、湿潤の思考

土器づくり民族誌からは、湿潤アジアにおける「共同生産」と乾燥アジアにおける「個別生産」という２つの対極的な生産様式が浮かび上がってきた。つまり、湿潤アジアでは集団が、乾燥アジアにおいては個人が、それぞれ重要視されているといえるだろう。では、そのような東西の対比はどこから生まれてきたのだろうか。

考古学者・藤本強は、穀物の調理に注目し、東西の対比を考察した。すなわち、穀物を製粉するか（穀物を焼く文化）、粒のまま食べるか（穀物を煮る文化）で大きく異なるというのだ（藤本 1994: 196-197）。麦を製粉する西アジアの場合、そのための製粉具はかさばるので、結果的に定住が促されたという。また製粉作業はたいへんな重労働であって、いち早く専業化したと指摘されている（藤本 1994: 201）。こうした西アジア（乾燥アジア）の状況は、東アジア（湿潤アジア）のそれとは大きく異なっている。すなわち、米を煮る場合にはむしろ、専用の炊飯用の調理器が必要とされ、結果的に、さまざまな土器がつくられることになるというのだ（藤本 1994: 202）。

さらに藤本は、農耕村落の景観にも注意を喚起する。「東の世界」すなわち湿潤アジアでは、村落は山や丘で地理的に区切られる。「数キロから十数キロくらいの範囲が見え、同じような村落がその中に点在し、一つの小宇宙を形成している」のだという（藤本 1994: 213）。それは「自己完結的な世界」（藤本 1994: 214）である。自然も人間も熟知したものばかりであり、人間関係は常日ごろ見知っている知人との関係が主体となる。小宇宙を構成する個々の村落は均質なものであり、また、個々の小宇宙の間に顕著な差異は見出し難い。「この小宇宙もまた自己完結的で、外との交渉なしで、十分に自給自足できる社会を作っている」というのである。

他方、「西の世界」すなわち乾燥アジアは視界を遮蔽する山や嶺に乏しく、地平線を見渡すことのできる世界であって、閉ざされた空間ではない（藤本 1994: 215）。「自らの集落の中で自給自足をすることは困難な世界」で、「集落が役割分担をしている」（藤本 1994: 216）。交易を通じて、「見知らぬ人間との対等の交渉」が日常的に出来することになるが、そこでは、「明確な自己主張」を旨とする行動原理が定着していくのである。

このような藤本の見解を補強するのが、石毛直道の論考である。石毛によれば、コムギからつくるパンは基本、保存食品であり、「早くからパンつくりは家庭の台所から離れて、社会の側の施設であるパン屋にまかせることができるようになった」。一方で、「飯炊きは家庭の台所を離れられない運命にある」という（石毛 1982: 7-8）。ご飯は炊きたてがおいしく、「「老化」の速度」が早い。だから家庭の台所を離れることができない。この状況は、コメとコムギに含まれる必須アミノ酸の多寡とも符合している（石毛 1982: 17-18）。すなわち、「コメは穀類のなかでも人体を構成するのに必要な必須アミノ酸の種類と量に富んで」おり、「一日五合の飯と植物性蛋白のおおい大豆からつくった味噌汁を食べていれば、カロリーと蛋白質はなんとかおぎないをつけることができる」というのである。一方で「コムギのパンだけで人体維持に必要な必須アミノ酸をとろうとしたならば、一日三キロ近く食べなくてはならない」。そこまで大量のパンを摂取することは難しく、「栄養学的にいえば肉と乳製品によって、パンに足りない必須アミノ酸のおぎないをつける食事体系になっていた」というわけだ。閉ざされた稲作社会においては各家庭で飯が炊かれ、麦作社会では不足する必須アミノ酸を補うべく、交易活動が必須となるのである。

以上をまとめると、以下のようになるだろう。

すなわち、稲作文化の湿潤アジアでは、自給自足を旨とする閉鎖的な「小宇宙」が形成される。食生活を支える炊飯が専業化されることはあり得ても、主流にはならない。あくまで自給自足的な

生活様式が深く根を張るのである。対して製粉作業を必然的に伴う麦作文化の乾燥アジアでは、自ずと、専業化・分業化が歓迎される。そもそも自給自足ができない環境にあり、また、遮るものの少ない開放的な世界にあって、交易活動は必然的帰結ともいえ、交易ネットワークを契機とした生産様式が乾燥アジアでは醸成されることとなる(6)。

さて、かくて描出された対照的な東西の風土と、先にみた土器の生産様式に、いかなる相関を見出せるであろうか。つづいて、検討を加えよう。

湿潤アジアの如き「閉鎖的な小宇宙」に身を置くのならば、そこは固定化された小さな社会となる。そのような社会を存続せしめるには、「他人との協業」(藤本 1994: 215) こそがポイントとなる。「他との和が最も重んじられ、強い自己主張をすることは禁物であり、人の思いを斟酌しながら、生活することが強く求められ」るのである（藤本 1994: 268)。そうした環境のなか、土器づくりにおいても共同作業の伝統が保持されたのは自然だ。すでにみたように、湿潤アジアでは覆い焼きが目立っており、気温・気象や入手できる燃料の種類といった環境の規制を強く受けたことはたしかであろう。しかし、それに加えて、湿潤アジアの風土のなかで醸成された人間関係も、共同で行なう覆い焼きの伝統を揺籃し、継承させた一因となっているとみるのは決して的外れではあるまい。湿潤アジアでは、昇焔式窯は選択されにくいのだ(7)。そして、家庭における炊飯のための土器をつくった湿潤アジアにおいて、土器はそもそも日常品である。必要な個体数を生産すればそれで事足りるので(8)、必要以上に生産性を追い求める必然性がない。ないなら、既存の人間関係を優先させて、共同作業で土器をつくる（写真９～11)。そんな湿潤アジアの思考を読み取ることができるのではあるまいか。

他方、乾燥アジアでは状況が一変する。交易活動が前提となる環境では、好むと好まざるとにかかわらず、異なる文化的背景を有する他者・他者集団との対等な交渉が求められよう。明確な自己主張をしなければ不利益をこうむってしまうから、自己主張は徹底したものとなり、それがいつし



**写真９**　女性による共同作業
（アミ族による素地準備）



**写真10**　家庭での土器づくり
（スマトラ島・ミナンカバウ族）



**写真11**　土器を焼く女性たち
（スマトラ島・ミナンカバウ族）

か、強固な自己認識へと変容したとしても不思議はない。そして、自己認識の強い社会において共同作業が成立する余地は、無論、皆無ではないが、限られてこよう。また、そのような社会に暮らす人間にとって個人主義は根源的な価値観であって、結果、陶工の独立性が強く志向されることになったのである。そして何より、乾燥アジアでは土器は流通させる商品だ。そのような商品を共同で焼成して帰属があやふやになるような事態は、厳に避けねばならない。経済的透明性が徒に損なわれてしまうからだ。個人で窯を構え、個別に操業することで、採算の独立性を守る。そのような戦略は、乾燥アジアにこそ相応しいといえるのである(9)。

## Ⅵ. 土器生産様式のアジア文化論

ここで、既往研究におけるアジア観をいくつか取り上げ、前項までの検討によって示唆された土器生産様式の地域性との関連を考察してみたい。とはいうものの、紙幅と筆者の能力には限界がある。アジアに挑んだ論客はあまりに多く、そのすべてを網羅することは現実的ではない。以下、アジアをめぐる学説を理解するうえで、欠かすことができない基礎的な研究に絞らざるを得なかったことを明記しておく(10)。

アジア文化論の嚆矢といえば、和辻哲郎である（鈴木 1988: 15）。和辻は広大なユーラシアに「モンスーン」、「砂漠」、「牧場」という３つの類型を見出した。３つ目の「牧場」はヨーロッパのことを指すが、「モンスーン」は湿潤アジア、「砂漠」は乾燥アジア、とそれぞれ読み替えることが概ね可能である。そして、「砂漠」における人間の構造は対抗的・戦闘的であるという（和辻 1979: 59）。乾燥アジアの厳しい環境のなかでは、座して待つことは死に直結するからである。一方、「モンスーン」では、耐え難い湿気の猛威を前に、人間は受容的・忍従的になるという（和辻 1979: 31）。この和辻の見解はあまりに牧歌的な環境決定論であるとして痛烈な批判を浴びることとなったが（梅棹・吉良 1976）、批判の陣頭に立った梅棹忠夫も乾燥アジアの攻撃性を、なかば直観的に、看破していることは無視できない（梅棹 1974: 124）。「モンスーン」に暮らす控え目な日本人と押し出しの強い「砂漠」のアラブ人の対比は、皮膚感覚として諒解されることが多いのではあるまいか。鈴木秀夫は和辻の慧眼を「直観」と評し、直観はときとして客観的な論証を凌駕し得ると主張している（鈴木 1988: 18）。和辻の直観に抜本的な修正を迫る民族誌事例に遭遇することは、実はとても稀有ではあまいか。少なくとも筆者に、そのような事例に遭遇した経験はない。和辻の直観は客観的な論証を凌駕していると認めざるを得ない。

和辻につづくのが、松田壽男の「三風土帯説」であろう。松田は広大なアジアを、「乾燥アジア」、「湿潤アジア」、「亜湿潤アジア」に区分した（松田 2006: 19-20）。和辻ほどに湿潤アジアの受容性・忍従性や乾燥アジアの対抗性・戦闘性が強調されることはないが、両学説の相似は随所に見受けられる。たとえば、「オアシス世界（つまり乾燥アジア、筆者註）のクサビが華北に強く接触」（松田 2006: 34）したという記述があり、乾燥アジアの対抗性・戦闘性が暗に指摘されている。また、湿潤アジアについては、インドに関する以下の言及から、松田の考えに迫ることができる。すなわち、松田は「水田社会の定着性・固定性」を強調する。当初、乾燥地域であるインダス川に進出した印

欧語族は、やがて湿潤なガンジス川へも展開した。しかし、「タンボに足を踏み入れたら抜けない」（松田 2006: 69）。乾燥アジアは湿潤アジアへと易々と侵入を果たしたが、湿潤アジアは唯々諾々とこれに飲み込まれてしまうのではなかった。現在、インドはヒンドゥー世界であるが、ヒンドゥー文化が固定化するのは、ガンジス進出以後とされる（松田 2006: 69-70）。湿潤アジアの基層文化は強固に残存し、乾燥アジアの文化要素を逆に併呑しながら、ヒンドゥー文化が確立したのである。つまり、湿潤アジアは受容・忍従に終始するのではない。乾燥アジアからのプレッシャーを冷静に受け止め、柔軟な対応もできる。そうした主体性を湿潤アジアの裡に見出した慧眼は、松田の筆頭功績に掲げられてもおかしくないと思う。

近年では、松本健一が独自のアジア文化論を展開した。松本は「乾燥アジア」を「砂の文明」、「湿潤アジア」を「泥の文明」と表現した。「砂の文明」では「国境を縦横無尽に超えていく」「ネットワークする力」が真骨頂とされ（松本 2012: 97-98）、この見解は和辻以来繰り返し想定されてきた乾燥アジアの対抗性・攻撃性とよく符合するだろう。対して、「泥の文明」では豊かな自然の恵みを効率よく享受するために、経験則こそが尊ばれ、「内に蓄積する力」が涵養されるという（松本 2012: 83, 122）。「内に蓄積する力」とはまさに受容性の発露であって、ここに及んでも、和辻以来の伝統的アジア観は深刻な齟齬をきたしていないことは驚きに値しよう。

たしかに、和辻のアジア観は直観の賜物であったかもしれないが、それでも、和辻学説を完全に否定することはとても難しいのである。ここに藤本強や石毛直道が克明に描出した東西の対比を踏まえれば、既往のアジア観に奥行と立体感を賦与することができよう。

すなわち、苛烈な乾燥アジアにあっては、人間集団が完全な孤高を保って存続することは難しい。交易をすることが必然であり、苛烈な対人交渉を余儀なくされ、結果、攻撃的な気性が醸成されるのである。そして交易を旨とする乾燥アジアでは、交易品としての生産活動こそがメインであって、結果として、職人の独立性が強く志向される。かような戦略が、乾燥アジアにおいては顕在化していくのである。

他方、湿潤アジアでは、自給自足可能な小宇宙の形成が顕著で、交易活動は必ずしも必須ではない。構成員が入れ替わることの少ない閉鎖的農村社会では、他者への配慮や共同体の調和こそが重んじられるのである。それはときとして、受容性・忍従性となって表出しよう。そして、家庭で飯を炊き、そのための土器をつくる湿潤アジアでは、閉鎖的で固定的な共同体の調和を崩すことなく、共同で生産にあたるのが習い性となるのだ。

乾燥しているか湿潤であるかという気候・風土の相違が、当該社会の基本パターンを塑形し、そのパターンの範疇で、それぞれ独自の生産様式が醸成されていくが、それは人間関係の構築と相似する。否、同義とさえいえよう。かくて、土器という物質文化に着目し、人間関係の縮図ともいうべき生産様式を検証するならば、既往のアジア観は色褪せることなく、むしろ輝きを増そう。その光明はアジアの基本構造を克明に照らし出してくれるのだ。

## Ⅶ. むすびにかえて

土器づくりのような工芸が自然環境の桎梏から解き放たれることはたいへんに難しい。のみならず、環境は生産様式、ひいては地域社会の人間関係にさえ深甚な影響を及ぼすようだ。だからこそ、乾燥と湿潤の対比は自明であるはずだが、鈴木秀夫はつぎのような警鐘を鳴らしている。風土論において、乾燥や湿潤が語られることはあっても、それは一地域の「ほとんど点的」な把握にとどまっており、自然環境が同じならば、同様の事象が成立するのか否かについては検証を欠いてきたのではないか、と（鈴木 1988: 16-17）。そうなのだ。乾燥はどこまで乾燥なのか。湿潤はどこまで湿潤で、どこから乾燥に切り替わるのか。両者はどのようにオーバーラップするのか、あるいは、しないのか。乾燥と湿潤の対比を踏まえ、両者が接するところでの検証はたいへんに興味深い課題となる。

そして、乾燥と湿潤がせめぎ合う「境界のアジア」においては、土器づくりの技術は折衷するようだ（齋藤 2014b: 6-7）。技術が折衷した背景を探り、その技術を駆使する職人たちの生産様式を見定めようとするとき、そこに浮かび上がってくるのは「乾燥の戦略」か、はたまた「湿潤の思考」か。稿を改めて、考えてみようと思っている（齋藤 2015b）。

### 註

⑴ 祖父江孝男は、「その土地の自然条件→資源の状態→生産の様式→生活の様式といった関係を包括」するものを、風土であるとした（祖父江 1971: 63）。「生産の様式」のひとつである土器生産様式を「中間項」と見做す論拠となるであろう。

⑵ 乾燥アジア（Dry Asia）ならびに湿潤アジア（Wet Asia）の区分については、松田壽男（2006: 図２）を参照のこと。なお、松田は中国大陸に、Dry China（華北）と Wet China（華南）を峻別し、前者を「麦のシナ」、後者を「米のシナ」と表現した（松田 2006: 52）。アジアの基本構造を推測するうえで、たいへんに示唆に富む言説であると評価したい。

⑶ 厳密には、西アジアでは「ピット窯」と呼ばれる単室構造窯の操業も古くに遡行し、かつ、現代にまで残されているという（小泉 2010: 996）。加えて、民族誌には野焼きの事例もあるという（Matson 1995: 1558, Fig.4）。しかしながら、エジプトにおいて昇焔式窯が卓越している状況や、昇焔式窯が、今日の中東地域に広く認められること（Matson 1995: 1559-1560）を踏まえるならば、乾燥アジアにおける土器焼成の主流は昇焔式窯であるとの判断に落ち着くのである。

⑷ エジプトと台湾をもって東西アジアをそれぞれ代表させるのは疑義のあるところであろう。もちろん、網羅的な民族誌的検討の有効性を否定することはできない。しかしながら、本稿は比較民族誌の観点から、東西アジアの対比を描出しようと意図するものであり、加えて、職人組織や性別分業の観点をそこに盛り込もうとするものである。そうした問題意識にもとづく研究を遂行しようとすれば、比較に耐える均質なデータの抽出が前提となるが、既往研究の現況はそれを許さない。東西アジアに等しくフィールドを求めた先行研究を、筆者は寡聞にして知らない。エジプトと台湾は隔絶しているため、両者の検討のみに頼って何らかの知見を導くことは無謀といえるが、東西アジアの典型と目される両事例を比較検討することは、少なくとも、研究の出発点とはなり得よう。そのうえで、両者の地理的・文化的隔たりを補完する中間的な事例の検討を加味しようとするのが本稿の企図であるとご理解いただければ幸いである。

⑸ 民族誌情報にもとづけば、土器製作者は女性であることが多いが（Murdock & Provost 1973）、専業性が高まっていくのに合わせて、男性の土器製作者が目立っていく（日常品としての土器は女性がつく

り、交易品としての土器は男性がつくるとされ、また手捏ね成形は女性、ロクロ成形は男性と考える向きが強い、齋藤 2009a: 42-43)。しかし、素朴な土器づくりであっても男性が行なう「例外」も存在し、それがヤミ族の事例であるという（都出 1982: 24)。核家族に立脚する独特の生産様式として、同事例はたいへん注目されるのである。

⑹ 近年では、佐藤洋一郎も異口同音の結論に至っている。すなわち、糖質と脂質の摂取の在り方に着目し、乾燥地域おける「麦とミルクのパッケージ」を想定し、湿潤地域における「米と魚のパッケージ」と区別したのである（佐藤 2016: 158-159)。

⑺ 南タイ、プウ・モウ村でキセル窯が操業しているとの報告があり（小野 2002: 図17)、湿潤アジアでも昇焔構造の窯はたしかに存在している。しかし、この窯は良質な白色胎土を利用した土器の焼成に利用されており、黒斑抑制のために導入されたと考えられる。こうした特別な背景のもと築窯された事例を除けば、湿潤アジアにおいて昇焔式窯はあくまで傍流にとどまると判断するのが適当と思われる。

⑻ 炊飯用の土器であれば、火にかけても壊れにくい均一な器厚と一定の耐火性が求められるであろう。丁寧な叩き成形であれば均一な器厚を達成しやすく、覆い焼きの長時間焼成は一定の耐火度を土器に与えてくれるであろう。つまり、叩き成形・覆い焼き焼成という湿潤アジアの土器製作技術は炊飯用土器の生産に適ってといえるのではないだろうか。ここに、環境に規定された食文化と土器製作技術の関連を見出すことができるのである。

⑼ 加えて、流通する商品としての土器ならば、見栄えが重要視されるのは当然といえる。土器の場合それは焼き上がりの発色であり、黒斑の発生はできる限り抑制したいところとなる。よって、昇焔式窯が歓迎されるのである。規格品を短時間に大量に成形するロクロの利用と併せ、乾燥アジアの基層技術をなしたことは、大いに首肯されるといえるのではあるまいか。

⑽ 割愛したものの、アジアを俯瞰する考察としてはほかに、高谷好一（1997)、川勝平太（1997)、森谷正規（1998)、安田喜憲（2004）らの研究を、本稿では参照している。また付随して、日本文化論についても、丸山真男（1961; 2004)、加藤周一（1976; 2004)、大林太良（1996)、赤坂憲雄（2000)、網野善彦（2000)、内田樹（2009）などを参照しており、その論理的な影響を受けたことを明記しておきたい。加えて、これらの論考が、和辻以来のアジア観を忠実に継承し、さまざまな形で言い換えたかのように筆者には感じられたのはたいへん印象的であった。アジアを論じようとする際、和辻以来の古典的・伝統的文化観は決して色褪せてはいないのだ（齋藤 2015b)。

**参考文献**

赤坂憲雄　2000 『東西／南北考：いくつもの日本へ』, 岩波新書.
網野善彦　2000 『「日本」とは何か』（日本の歴史第00巻), 講談社.
石毛直道　1982 『食事の文化論』, 中公新書.
内田　樹　2009 『日本辺境論』, 新潮新書.
梅棹忠夫　1974 『文明の生態史観』, 中公文庫.
梅棹忠夫・吉良竜夫（編）　1976 『生態学入門』, 講談社学術文庫.
大林太良　1996 『東と西 海と山：日本の文化領域』, 小学館ライブラリー.
小野正敏　2002 「東南アジアの土器づくり」第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会（編)『東南アジア考古学最前線』, クバプロ, 129-139.
加藤周一　1976 『日本人とは何か』, 講談社学術文庫.
加藤周一　2004 「日本社会・文化の基本的特徴」加藤周一、木下順二、丸山真男、武田清子『日本文化のかくれた形』, 岩波現代文庫, 17-46.
柄谷行人　2010 『世界史の構造』, 岩波書店.
柄谷行人　2014 『帝国の構造：中心・周辺・亜周辺』, 青土社.
川勝平太　1997 『文明の海洋史観』, 中公叢書.

木立雅朗　1997 「桶窯の民俗例：煙管状窯の焼成技術復原に向けての基礎作業」窯跡研究会（編）『古代の土師器生産と焼成遺構』, 真陽社, 351-371.
小林正史　2004 「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける覆い型野焼きの特徴」『北陸学院短期大学紀要』36, 203-228.
小林正史　2007 「稲作農耕民の覆い型野焼きの基本特徴とバリエーション」後藤明（編）『土器の民族考古学』63-79, 同成社.
齋藤正憲　2009a 「エジプトの土器づくり民族誌：土器生産様式に関する民族考古学的検討」『西アジア考古学』10, 33-49.
齋藤正憲　2009b 「世帯内生産としての土器づくり：台湾蘭嶼・ヤミ族の土器生産様式」『台湾原住民研究』13, 112-133.
齋藤正憲　2010a 「台湾原住民の土器づくりから何がわかるか：比較民族誌のすすめ」村井吉敬（編）『アジア学のすすめ』2, 61-87, 弘文堂.
齋藤正憲　2010b 「バングラデシュ・チョウハット村の土器づくりⅠ」『東南アジア考古学』30, 91-99.
齋藤正憲　2011a 「バングラデシュ・チョウハット村の土器づくりⅡ」『東南アジア考古学』31, 97-106.
齋藤正憲　2011b 「伝統と革新：台湾原住民の土器製作技術」『台湾原住民研究』15, 79-111.
齋藤正憲　2012a 「天井のある窯、天井のない窯：エジプト民族誌にみる窯構造と黒色土器焼成」『西アジア考古学』13, 63-71.
齋藤正憲　2012b 「バングラデシュ・プレムトリ村の土器づくり」『東南アジア考古学』32, 75-83.
齋藤正憲　2012c 『土器づくりからみた３つのアジア：エジプト、台湾、バングラデシュ』, 創成社.
齋藤正憲　2013 「バングラデシュ・チッタゴンの土器づくり」『貝塚』68, 9-19.
齋藤正憲　2014a 「インドネシア・ジャワ島西部：ブミジャヤの土器づくり」『貝塚』69, 1-9.
齋藤正憲　2014b 「境界／辺境論序説：土器づくりからみたアジアの境界と辺境」『教育と研究』32, 1-21.
齋藤正憲　2014c 「昇焔式窯は如何にして生まれたか？：インドネシア・ジャワ島西部の土器づくり民族誌から」『東南アジア考古学』34, 59-58.
齋藤正憲　2015a 「窯焼きと覆い焼き：熱履歴に着目した土器焼成技術の比較民族誌」『西アジア考古学』16, 1-11.
齋藤正憲　2015b 『境界の発見：土器とアジアとほんの少しの妄想と』, 近代文藝社.
齋藤正憲・佐々木幹雄・三好伸明　2003「エジプト、ダクラ・オアシスの土器つくり」『エジプト学研究』11, 5-29.
齋藤正憲・佐々木幹雄・三好伸明　2004「エジプト、シーワ・オアシスの土器つくり」『エジプト学研究』12, 75-100.
齋藤正憲・鈴木勝陽　2007 「台湾原住民の土器づくり：蘭嶼ヤミ族の事例」『教育と研究』25, 45-70.
齋藤正憲・鈴木勝陽　2008 「台湾原住民の土器づくりⅡ：蘭嶼ヤミ族の碗形成形」『教育と研究』26, 11-24.
齋藤正憲・鈴木勝陽　2009 「台湾原住民の土器づくりⅢ：豊濱村アミ族の事例」『教育と研究』27, 17-43.
齋藤正憲・鈴木勝陽　2011 「台湾原住民の土器づくりⅣ：恒春地区における土器文化の現状」『教育と研究』29, 47-61.
佐々木幹雄・齋藤正憲　2002 「エジプト・ファイユーム、ナズラの土器つくり」『エジプト学研究』10, 86-108.
佐藤洋一郎　2016 『食の人類史：ユーラシアの狩猟・採集、農耕、牧畜』, 中公新書.
鈴木秀夫　1978 『森林の思考・砂漠の思考』, NHK ブックス.
鈴木秀夫　1988 『風土の構造』, 講談社学術文庫.
祖父江孝男　1971 『県民性：文化人類学的考察』, 中公新書.
高谷好一　1997 『多文明世界の構図：超近代の基本的理論を考える』, 中公新書.

鳥居龍藏　1902 「紅頭嶼土俗調査報告」『鳥居龍藏全集』11, 朝日新聞社（1976年), 281-328.
都出比呂志　1982 「原始土器と女性：弥生時代の性別分業と婚姻居住規定」女性史総合研究会（編）『日本女性史Ⅰ（原始・古代)』, 東京大学出版会, 1-42.
中根千枝　2002 『社会人類学：アジア諸社会の考察』, 講談社学術文庫.
野林厚志　1996 「ヤミ族の社会生活についての予備的調査と今後の課題」『台湾原住民研究』1, 75-131.
藤本　強　1994 『東は東、西は西：文化の考古学』, 平凡社選書.
松田壽男　2006 『アジアの歴史：東西交渉からみた前近代の世界像』, 岩波現代文庫.
松本健一　2012 『砂の文明 石の文明 泥の文明』, 岩波現代文庫.
丸山真男　1961 『日本の思想』, 岩波新書.
丸山真男　2004 「原型・古層・執拗低音：日本思想史方法論についての私の歩み」加藤周一、木下順二、丸山真男、武田清子『日本文化のかくれた形(かた)』, 岩波現代文庫, 87-151.
三富正隆　1993 「台湾蘭嶼ヤミ（Yami）族における空間認識と世界観の変容」『地理学評論』66, 439-459.
森谷正規　1998 『文明の技術史観』, 中公新書.
安田喜憲　2004 『文明の環境史観』, 中公叢書.
和辻哲郎　1979 『風土：人間学的考察』, 岩波文庫.
Matson, F. R. 1995 Potters and Pottery in Ancient Near East. In J. Sasson et al. (eds.), *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol.III, 1153-1565. New York, Charles Scribner's Sons: New York.
Murdock, G. P. & Provost, C. 1973 Factors in the division of labor by Sex. *Ethnology* 12-2, 203-225.
Thér, R. 2014 Identification of Pottery Firing Structures Using the Thermal Characteristics of Firing. *Archaeometry* 56/1: 78-99.

# Strategy in Dry Asia / Thought of Wet Asia: An Explanation of the Contrast between West and East Asia based on the Modes of Pottery Production

Masanori Saito


## Abstract

Potters in Dry Asia often throw the vessel onto the potter's wheel. There are two basic types of potter's wheel: 1) a hand wheel with single disk and one bearing and 2) a kick wheel with double disks and two bearings. By utilizing the potter's wheel, a large quantity of standardized pottery is effectively formed in a short time. In Wet Asia, on the other hand, the vessels are formed by hand one by one. Potters beat the vessel on the exterior with a small wooden beater or paddle, putting a round stone or special fired clay tool on the interior of the vessel. This forming method called "Paddle and Anvil technique" predominates in Wet Asia.

As for the firing technique, an updraft kiln, in which a firing chamber is arranged just above a firebox, has been used for a long time in Dry Asia. Because fuel and pottery are isolated, the black spot is prevented from adhering to the surface of the vessel. It is often observed that each potter builds and operates a small kiln for his exclusive use. On the other hand, pottery in Wet Asia used to be fired by open firing method, which may be improved by "covered open firing", by covering the fuel and vessels with a layer of flame retardant material such as wet grass, straw, ash, rice hull or mud. Black spot is often attached on the vessel by this firing method, because the fuel comes into contact with the pottery. In addition, open firing can be easily enlarged to accommodates a large number of vessels, since there is no limitation on size. Some potters get together, each bringing their pottery, and carry out the firing in a group.

Why does such a contrast between Dry and Wet Asia occur? In Dry Asia, the geographically open environment has promoted active trading, resulting in a need for severe negotiations with others. In such a situation, effective mass production and financial independence should be strategically chosen. As opposed to Dry Asia, Wet Asia is geographically closed, and the community forms a lone "microcosm" of self-sufficiency. The cooperation with other residents of the same "microcosm" is extremely respected. And then, the financial independence of the potters would not be so strongly pursued. A tradition of esteemed collaboration in the modes of pottery production is firmly maintained as a result, and promotes the consideration of others in Wet Asia.